

Title	花山だより(9月) (續日食報告號)
Author(s)	月斗
Citation	天界 = The heavens (1936), 16(186): 491-491
Issue Date	1936-09-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/167335">http://hdl.handle.net/2433/167335</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 花 山 だ よ り (9月)

連日の酷暑で花山人も頗る意氣銷沈の態。テニスコートの上には我が物顔にトンプが亂舞して、人影一つ見えぬ。これは或夜の出来事：——夕陽が清水山に沈む頃になると山には楽しい夕涼みが初まる。子午線館の南側に三々伍々集まつて食後の團欒に蟲の音も思ひなしか楽しい。其の中に夕立模様の雲も取れ空には天の川がさえ渡たり、そろそろドームの開く音も聞えて觀測が初まる。これからが山の世界である。寫眞用に汲み上げるポンプの響きが微かに建物全體に傳はつて、時折聞えてくる汽笛の音、電車の軋る音以外には將軍塚風の松風の外は人の聲一つ聞えぬ頃、時計は12時を少し廻つてゐたであらう。某氏はドームの東側の露臺に出て靜かに空を眺めてゐると北山傳ひに吹き上げる一陣の風に、宛も蛇の腐敗した様な臭氣が鼻をついた。思はずハツとして見降す松林は——數ヶ月前の首吊事件の松の切株。井戸の側に久しく腐爛した死體——の連想を深めて、又一陣の風に鼻持ならぬ彼氏は扉を閉めて中に入つたが、微音を立てゝ動く運轉時計の音も部屋一面に感ずる異臭に全く落付いた氣持もせぬ。さすがに彼氏は宿舎に行つて人を搜したが寢靜まつた頃とて、又取つて返して仕事を初めたが何だか落付けぬ。其の中某氏が懷中電燈を照して應援に來て2人して怪物の正體を究めんとすると、鼻孔を刺す様な異臭に閉口してドームを閉めて引揚げてしまつた。宿舎員皆起出でゝ評定數刻、夜も次第に更けて無氣味な中に翌朝の一齊搜查を約して床に就いた。翌日は一同總出で山狩を決行したが空しく引あげた。怪物の正體は午後に至つて漸やく判明したが、全く噴飯物のナンセンスで、大方の御判斷に御任せする。今度購入したトムキンス天文臺の60糎カセグラン型反射鏡は其の中到着次第花山で組立ての上試験する事にならう。豫ねて本欄で豫告して置いた大津石場の藤井天文臺では、毎月第2日曜日を決めて一般に公開せられる由、同好諸氏の御利用を、特に大津近傍の方々の御援助を御願ひし度い。

9 月 7 日

(月 斗 生)